

第2回 市立高等学校等改革検討委員会 議事録

1 日時

令和元年（2019年）10月31日（木）午後2時00分～午後4時00分

2 場所

熊本市役所議会棟2階 議運・理事会室

3 委員（50音順）

出席委員：池田委員、川上委員、坂本委員、高智穂委員、田中委員、苫野委員、永村委員
野副委員、福西委員、矢野委員、吉山委員

欠席委員：荒瀬委員、山川委員

4 配布資料

資料1 会次第 等

資料2 アンケート調査結果報告書

資料3 事務局説明資料

資料4 事前意見集

5 次第

開会

（1）委員長挨拶

（2）事務局説明

（3）意見交換

①生徒や保護者に選ばれる、新たな時代に対応した魅力ある高等学校・専門学校とは

②市立高等学校及び市立専門学校をどのように改革すべきか

閉会

〔開会〕 〔事務局〕	定刻となったので、これより第2回市立高等学校等改革検討委員会を開会する。
〔会議の成立〕 〔事務局〕	本日は11名の委員が出席しており、委員定数13名の半数以上が出席しているので、「市立高等学校等改革検討委員会運営要綱」第6条の規定により、本日の会議は成立していることをご報告する。
〔委員長挨拶〕 苦野委員長	また、同要綱第7条の規定に基づき、本委員会は公開とさせていただきます。
〔委員長挨拶〕 苦野委員長	議事に移るので、進行を委員長にお願いする。 はじめに、苦野委員長から一言頂戴したい。
〔委員長挨拶〕 苦野委員長	前回からあつという間に3か月が経ち、その間にワークショップを各学校でやっていただいた。高校等改革というのは委員たちだけでやるものではなく、当事者の方たちとか、地域の方たちとか、色々な人たちの力を借りながらやっていく必要があるということを強く申し上げていたが、それが具体的になりワークショップが行われたということで、残念ながら参加はできなかったが、非常に有意義なものだったと聞いている。今日は3人の生徒の皆さんにも色々お聞きしたいと思うが、学校をつくるというのは、それぞれの関心とか、それぞれの風習などに応じて、みんなでやっていくものである。よりよい学校をつくっていくような改革をしたいと思うので、今後ともよろしくお願ひする。
〔議事〕 苦野委員長	では議事に移る。 意見交換に入る前に、事務局のほうから資料の説明をお願いする。
〔事務局説明〕	—事務局説明—（資料3に基づく説明）
〔意見交換〕 苦野委員長	それでは意見交換に入る。鈴木さんのお話も工藤さんのお話も、期せずして、かなり親和性がある。ここに用意した資料とも親和性があるのではないか。エージェンシーという言葉もしかり、今の教育界のキーワードになっているので、その辺の情勢も踏まえながら議論していきたい。
〔意見交換〕 苦野委員長	本日の論点は、「生徒や保護者に選ばれる、新しい時代に対応した魅力ある高校・専門学校とは」「市立高等学校及び市立専門学校をどのように改革すべきか」の2点である。
〔意見交換〕 苦野委員長	なお、次回の第3回では改革の方向性を絞り込むことも念頭に置いていただき、第1回の内容から更に踏み込んだ、具体的な議論となるようお願いする。
〔意見交換〕 苦野委員長	資料4は、前回同様に事務局の方で、今回の論点に関する各委員の皆様のお考えを事前にお聞きしたものをまとめている。
〔意見交換〕 苦野委員長	まずはお一人ずつ、3分以内を目安に、ポイントを絞ってご発言をお願いする。ご欠席の方の意見については、最後に事務局から説明していただく。では池田委員からお願いする。
池田委員	私は演劇を使って大学や小学校、中学校、専門学校のワークショップとかでお邪魔することが多い仕事をしている。今は鎮西高校の舞台類型という演劇の授業を週に1回担当している。資料2のアンケートはとても面白く拝見した。その中で小学生の将来の夢が「優しい大人」、中学生が進学先選択の際に重視することが「学校の雰囲気」とか、将来の自分になりたいものとか、強い気持ちというよりは、在学中いかに楽しく安心して過ごせるかということが大事だと、みなさん考えていると思った。自分は高校の外部講師をしていても、楽しくというよりも危機感なく過ごせることを大事にしている気がして、それがあまりいいことではないと感じている。自分は舞台類型という将来芸能の道に進みたいというお子さんが多いクラスだが、そこ以外の専門学校に行っても、最初はやる気満々で入っても強い意志がないと、人間関係で簡単にやる気が削がれてしまって、あとは休むとか部を変えるとか、退学するとかいうシステムが、昭和の頃と

比べて、すごく移りやすくなっているのも、夢が踏ん張りにくくなっている。先生方も強く言うと、色んな問題があるので、本人の気持ちや状況を尊重しようと、目線を下げて話される。それで却って踏ん張る力がなくなっている。その学科とか先生たちの醍醐味を味わう前に離れてしまったり、みんなで何かをつくるとかいう経験をする前に、集まることだけを目的にしてしまったりすることがある。改革の内容は今からどんどん挙がってくるとは思うが、「ここに来たらこうなれる」というくっきりしたイメージ、それを導いてくれる強烈なリーダーが必要と思う。優しい人や雰囲気の良いさを求めているその奥には、強く引っ張ってほしい気持ちがあるのでは。

②については、必由館、千原台ともに考えていないというのは高い数字だと思った。ここで、特化した何かを打ち出すのは違う気がしている。熊本市立としてニーズに答えられる何かがないかと思った。今、家庭的に大変なお家とか、学習する環境にない家庭の子どもが多い中で、進学を断念したり、変更したり、長期欠席したりする子どもが多い。そこに寄り添った学校がつかれないかと思う。このあたりは専門の皆さんのお話を聞かせていただきたい。

専門学校については、声優に関する学校がすごく増えている。学ぶ環境を作ろうとするのではなく、儲ける目線で声優や芸能を打ち出している学校が増えていることに危機感を持っている。私の周りでも一生懸命にお金をためて声優の学校に行った子がたくさんいるが、養成所の「養」は養分の「養」と言われることもあるくらいだ。実際入学してもプロになれるきっかけがほとんどない。優しく温かく叱られない授業がずっと続いて、卒業したらなんとなく話す仕事から離れる子どもたちがとても多い。オープンスクールや体験入学を華々しく打ち出して、親もそこに入れるのに必死になっている。現場の学校の先生も、進路については把握できずに、結局は本人の判断に委ねているところが多いと思う。専門学校にお金だけ取られて、夢がしぼんでしまう若い人がたくさんいるのがもどかしい。

一方、ビジネス専門学校については知らなかったが、ネットで検索すると、全国専門学校事務分野ランキングで全国216校中9位。すごいなと思った。評価は星5つ中4つで、「学費が安い」「少人数で勉強しやすい」「楽しい」など。専門学校も市立高校と同様、華やかな転換をすることも大事だが、今あることをキープしていくこともおもしろい。みんなの目線が動くような何かを考えられたい。例えば校名を変える、サイトが地味なのでリニューアルするなど、目につくような変化を考える。

川上委員

魅力のある学校を考えた時に、今の時代に合わせて、今AIとかがすごく伸びてきていて、そういうことを勉強できれば、社会に出た時にいい知識になり、魅力ある学校になる。

地域の方や保護者を学校のイベントに呼び込んで魅力を伝える。それがPRにつながったら、定員割れとかなくなる。

生徒のCDP（キャリア・ディベロップメント・プログラム）が、生徒が自分自身で自分の未来を考えて、卒業時にこうなっているぞというのを考えられたい、そのとおりに進んでいだけなので、それを考えられる学校が魅力的だと思う。

②だが、ワークショップで出した意見だが、市立高校と専門学校を一緒にしてしまえばよい。専門学校にAI科を作ったとして、2年間で学べるかということ、それはきつい。市立高校にAI科を作ったとしても3年間しかない。それで市立高校と専門学校を一緒にする、つなげるとAIについて5年間で学ぶことができ、専門知識を深めることができる。これを理由に入学を希望する生徒が増えるのではと思っている。専門学校は5年間にすることで、市立高校からそのまま上がってくる生徒もいるので、定員割れもなくせる。5年間学ぶことによって、専門性の高い知識を持った人材が生まれて、それをどんどん出していける。全ての学校で場所が分からないとか、どんな高校とか、PR不足がよく出ていたので、まず売込みしてみるのも一つの手なのではないかと思う。

坂本委員

私は3月までは県庁にいた者であり、あまり経済界を代表したような話はないかもしれない。第1回の議事録を読むと、教育長から「偏った意見でも何でもいい」ということだったので、少し偏った意見になるかもしれないが、8ページに私の意見を書いている。新しい時代に対応した魅力ある高校というのは、例えばAIとかIoTとか

そういうことに対応できる能力を身に付けるということ、それを集中的に特化したかたちでやると魅力が出る。外国語コミュニケーション能力は絶対に不可欠である。それと、熊本市にあるということからすると、漫画、アニメ、ファッションといった、熊本市として優位性をもっているようなところに特化したような知識、技術を身に付けるようなことができればいい。もう一つは熊本城の石垣の工事に20年以上かかる。20年以上仕事がある。また、熊本城だけでなく、全国で数多くある城の石垣がいつ、どうなるか分からない状態なので、石工の仕事はなくならないと思う。石工さんたちはご高齢の方が中心にやっておられて、それがやれるような技術者を育てることを熊本から発信すると面白い。それから、熊本の伝統工芸、例えば象嵌、川尻の包丁、そういうものを引き継いでいけるのか危機感を持っている。そういうことができれば熊本的だと思う。

これは、私の偏った意見としての魅力ある高校なのだが、もう一つのテーマである生徒や保護者に選ばれるという観点からすると、偏見かもしれないが、進学率、就職率、そういった結果で選んできているのではないかと思う。今までこの高校はどんな大学に行って、どんなところに就職しているか、そういうのを見ながら、選んできている。結果を出すというのが選ばれる一番の秘訣であると思う。

それに基づいて、②の「どのように改革すべきか」だが、結果を出すためには、教える側に能力が必要であろう。例えばA Iとかのカリキュラムも必要だといった時に、そんな最先端のことを教えられる体制なのか。それをどう担保していくか。具体的な制度をつくっていかないと、日々の教育に追われていってしまう先生方が新しいことを学んで教えるという、それは非常に難しいことだと思う。色んなところに研修に出してもらい期間とか、他の組織と交流するとか、自己研鑽を先生方ができるような体制が必要である。

専門学校についてはインターンシップなどが望まれているように、産業界とどれだけ連携していけるか、だと思っている。できる限り就職に直結するような実務の習得をするのがいい。

今日初めてアドバイザーの意見を見たが、最後の11ページの右側で「市立ならではの取組として、市のまちづくり会議に生徒が必ず参加できる仕組み」とある。市立高校であるからには、市役所とどう関わるか、市が持っている色々なまちづくり会議とかに必ず出て来るとか、市役所で必ず1か月間働くという経験ができるとか、いうことを売りにすることなどがいい。

欄外に書いているが、市立高校であることの意義は何なのか。これは元々この改革の出発点、問題意識の中に、人口減少社会、少子高齢化といった話もあったと思う。そういう中で、県立高校もたくさんある、私立もいっぱいある。その定員が減っていく中で市立高校の存在意義をどう考え、どう改革していくべきか、ということを議論するわけだが、そのためには多分、市立高校が存在していなければならない意味を毎回考えていかなければならない。それは多分、生徒から保護者からというよりは、市民からどう選ばれるかという視点が重要だと思う。

市としてどんな人材が必要なのかという議論が先にあるべきで、例えば熊本市の産業構造。熊本市というのは、製造業が熊本市の周りにあって、市の外側というか、連携中枢都市圏の中にある、熊本市が逆にベッドタウン化していて、外に通勤しているというようなこと。熊本市の中の一番の産業は第3次産業。

そういう中で、どういう人材が今求められているのかというのを、産業界が必要とする人材というのが、市の総合計画の中であるとか、「しごと・ひと・まち総合戦略」の中に書き込まれてくる。それは、ここでの議論をベースとして、こんな人が必要だということを、市の上位計画の中にも書いてもらい、そこから市の必要な人材はこれだからこういう方向が必要だという、そういう論理が必要ではないかなと思っている。

毎回毎回、英語が必要だとかI TとかA Iとか言うが、日々変わってきている。例えばドローンが今ものすごくブームというか、必要とされているが、A Iを搭載した空飛ぶロボット。5年前はほとんどなかった。今はそれがこんなに使われている。東日本大震災の時の映像にドローンはほとんど使われていない。熊本地震はドローンですごく記録を残している。

そういう日々の進化形に対応するためには、新しいものに飛びつくという、熊本人の気質をもう少し生かしていければと思う。「わさもん」を育てるといような、そ

う教育理念が必要なんじゃないかと思う。

一方で、変わらないもの、例えば石工のその技術の部分とか、肥後象嵌とか、そういったものを引き継いでいけるような、「もっこす」的な、そういったところも教育理念の中に入れていければと。そういったことが必要じゃないかなと思っている。

まず、私がどういう立場から話をしているかということ、私は大学院生で、飲食店を経営していて、高校の非常勤講師をしていて、塾でスタッフをしていて、小学生の保護者であるという五つの立場から話をしている。

ワークショップの3回とも全て出席した。色々固定概念や固定観念があって、偏った考え方でいたものがかなり崩れて、いい機会になった。

生徒や保護者に選ばれる、新しい時代に対応した魅力ある高校・専門学校とは、学校としての名声にとらわれずと書いたのだが、私は県外出身者なので、熊本がどうかということがあまりよく分からないが、高校に対するプライドが高い県民性を持っておられることは承知している。そういうものを大事にしなくてはいけないというのは分かるが、そこばかりにとらわれていても、熊本県で育つ高校生は、必ず熊本県内で生きていくのではなく、どこにでも行く可能性があり、もしかしたら宇宙に飛び出すかもしれないということを考えると、学校として名声がどうかというのはあまり関係がない。目の前の生徒が、どこへ行っても生きていけるように育てるのが教師としての役割、学校としての役割かと。

私は、総合学科におけるキャリア教育を勉強しており、今、修士課程2年なので、まさに論文執筆の大変な時期に来ているが、総合学科というのは集大成が20年後、30年後だという風に言われている。生徒が、授業してすぐが大事なのではなくて、20年後何をしているか、30年後何をしているか、どういう風に死んでいくかを考えながら遂行していくということが元々のコンセプト。そういったことを提供するというのもまた、総合学科でないにせよ、教員の使命と思っている。

三つ目、真に生徒の主体性を生かした学校運営が実現できるということ。これは、ちょっとびっくりしたのだが、必由館高校では、生徒による授業評価を行っていないことを伺った。これはかなり驚いた点で、私が行っている学校でも行っているし、一般的にどこでもやっていると思っていた。基本的にその辺はどうかと思う。やった方がよい。主体性を生かした学校運営って、これからエージェンシーとか、そういう考え方も、今だいぶ出て来ており、必要なと思っている。千原台はやっているということで安心した。ビジネス専門学校は聞きそびれたが、生徒による授業評価は大事と思っている。

職業ベースではなく、生き方ベースと思っている。どんな職業に就くかではなくて、どんな生き方をしたいかを大事にしていきたい。今やっている職業は20年後あるかどうか、30年後あるかどうか分からない。私が、今行っている仕事が20年後はないかもしれない、高校の非常勤講師が20年後には存在しないかもしれないと思うと、今ある職業にどう就くかではなくて、あなたがどう生きたいかを実現するには、どういう未来の選択の仕方をする、キャリアデザインをしていくかということが大事と思う。

高校について短期的な方策と、中長期的な方策に分けた。なぜかということ、こちらからこれしなさい、あれしなさいでは、現場の先生は戸惑い、理念と実態がかなり離れてしまうのではないかと思ったため。

短期的な方策として定期的にスピーチやディスカッションを取り入れてほしい。特にアクティブラーニングとか、ディスカッションとか、そういったものが意外と取り入れられていないということが今回のワークショップでよく分かった。それはかなり重要。これからの学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにも、ここはしっかり押さえていただきたい。プロジェクト学習はぜひやってもらいたい。これは私が農業の教員だからということもあるが、大事と思っている。

中長期的な方策として、この前のワークショップの時に、「単位制がいい」「自分の時間割を作りたい」と生徒が言っていた。実は総合学科は自分の時間割をつくる学科。縛りはあるものの、自分の好きなものを選択して、カリキュラムの時間割を作る。これは希望のあるカリキュラムだと思っている。

社会人講師も積極的に採用していただきたい。

校則や制服の選定は、生徒とともに是非行っていただきたい。ワークショップで、生徒さんが「この制服本当に暑くて困っているんです。」と言っていた。なるほどそうい

う意見は、今まであまり取り入れられていなかったかもしれないが、これからはどんどん入れてほしいし、これからはセクシャルマイノリティの方もいるわけだから、そういう意見も柔軟に取り入れて、「制服でもいいよ。」「スカートでもいいよ。」「生物学的に男子だったとしてももちろん、スカートをはいていいよ。」というような、そんな柔軟な発想でいていただきたい。

専門学校に関しては、AI、ドローン、ユーチューバーを育成したい、アニメ・ゲーム、そういうことをどんどん言ってくださる先生方だったので、とても期待が持てると思った。

年金や保険に関する、実際生活の中で生きていくための授業も必要だと思ったし、実際社会に出て企業が向かない人もいる。私のように大企業には絶対勤められない、組織の中では生きられないような人も絶対におり、そういう時に、一つの方法として起業ということがある。起業することによって、組織の中でうまくやっていけない人も、自分の会社を作って、自分でやっていくということも一つの方法と思う。その辺を、ちゃんとしっかり、高校生も一つの選択として、こういう方法もあるよというのが、発達障害も問題となっているからこそ大事にしてもらいたい。

中長期的な方策として、先ほどN高校とか、通信制の導入という話があったが、生まれ持った特性上や、環境、お金、経済問題、家庭環境によって、学校教育になかなか入っていけない人が今かなりいるわけで、そういう人たちが、自分たちが勉強したい時に勉強したいものを、勉強しやすい環境のもとでできるという場所を作るというのは、やはり公営系の熊本市というパブリックな機関にとって、大事な市民に対するサービスというか、大事な視点なのではないかと思っている。

私は、障がい者について学んでいるので、人体姿勢入力でパソコン入力してとか、ALSの患者さんとか、今、「OriHime」が話題になっているが、人体姿勢入力でロボットを動かしてお仕事ができるというシステムが、今、開発されていて、そういった人体姿勢入力でお勉強ができるとか、家にいながらにして勉強ができるとか、そういうシステムはかなり有効であると思うので、是非、期待している。

ロボットの製作実習だが、「OriHime」というロボットは、ALSの患者さんが家にいながらにしてコントロールするが、そのロボットを、とある研究者の方が自作してどんどん広めている。そういったロボットの製作実習というのもこれからかなり期待の持てる分野かなと思ひ、事前意見に記載した。

苫野委員長

自分の自由で、幸せな人生を切り開いていくというのが一番の大本かなと思っている。そのために何をするかということで、一つ実例として、High Tech Highというアメリカで今、非常に広がっている、全部プロジェクト学習という学校。幼稚園から教職員大学までも作ってしまって、今全米で7校、8校ぐらいになっただろうか。

ここの、「Most Likely To Succeed」というドキュメンタリー映画があって、これが世界中に知れ渡って、日本でも、熊本でも何度か上映会があり、上映会をやってその後みんな対話をするという会を結構されており、私たちも主催したことがある。私はこの前ワークショップをやったが、今度はこれを、この関係者みんなが集まって対話するというのもあっていいのではないかと思っている。改革をする時に、イメージ、たたき台となるものを共有する必要があると思うため、そういうこともあっていいのかと思っている。

High Tech Highの概要は資料を添付したので確認いただきたいのだが、少し概要だけ言うと、このHigh Tech Highは貧困地域に作っている。誰でも入れる。ただ、入学希望者がたくさんいるので、郵便番号に基づく抽選をしている。今の価値観で言うのはどうかと思うが、98%は大学に進学をしていて、州のテストも誰も試験勉強をしていないのに平均を超えている。「Most Likely To Succeed」は、それが、なぜかというところにフィーチャーしたドキュメント。最初は自信がないような子どもたちも、毎日毎日かなり大掛かりなプロジェクトに取り掛かっていて、それを、失敗を重ねながらプロジェクトを成功させる。その過程で自信がついたり、チームワークがついてきたり、そういった成果を得ており、私の仲間たちも見に行くと、これは本物だったと、このドキュメンタリーに嘘はなかったと言っていた。そのような実例が今、High Tech Highをはじめ、世界中にどんどん出てきている。我が国でも堀川高校や隠岐島前高校、広島叡智学園など、そういった流れが世界中にドーンと起きています。

一旦、その流れをみんなで知って、それをたたき台にして議論するというのもいいのではないかと思って事前意見に書かせていただいた。一つのたたき台。

評価というのは、何か点数評価される。我々社会に出て常に点数評価されるということはない。色々な人たちから、色々な観点からフィードバックをもらいながら自分をより高めていくというのが評価の基本であるから、このHigh Tech Highというのも、展示会というかたちで地域の人や色々な人たちを呼んで、色々なかたちでフィードバックをしてもらう、そういったかたちで評価がなされたりしている。

ここの特徴は、先生に徹底的な権限があって、全部先生がやりたいようにやる。そういうやり方で、逆に言うと先生にもものすごく責任とクリエイティビティを求められているということ。

学校づくりのオーナーシップは生徒にあり。これは工藤校長もよく言われるように、学校づくりの主体として生徒が関わってくる。学校づくりのオーナーシップというのはちょっと言い過ぎかもしれないが、生徒と大人たちが一緒に学校をつくっていく、そういったあり方がこれからは大事。エージェンシーを育む、高めるという観点においてもそういったものが根幹にある必要があるのかなと思っている。

専門学校も全く同じモチーフであるが、私が勝手に言っていることで、田中委員もおっしゃっているが、一つは会社を立ち上げてみようかという。そういったことをもしやってみるとしたら、まさにエージェンシー。自分で人生を切り開くということの非常に貴重な経験になるのではないかと思っている。

前回、企業からのアンケートに苦言を呈したが、求めている人材が「礼儀正しい」とか、「協調性がある」とかということばかりで若者としてのクリエイティビティを刺激して、今ある企業に入っていく以上に、やはり、人口減少という話もあったが、地方こそ新しい企業なり、新しいソリューションを起こしていけるような、まさにそういった人材というのが必要となってくるのではないかと思うので、既存の企業にとらわれない、むしろ自分たちがこの熊本をつくっていくという若者たちを育てていく、そういった肥やしになっていただくとうれしいなと思っている。

I B (国際バカロレア) は検討していいのではないかなど。I B認定校になるというのも、一つ考えていいかもしれないなど。しかも中高一貫にして、MYP (ミドル・イヤーズ・プログラム) というコースとDP (ディプロマ・プログラム) というコースをどちらも認定校としてしまうというのも、もしかしたら一つ、これはまさに探究というカリキュラムを中核としたI Bであるけれども、進学も海外の色々な提携校、このバカロレアを修了したら行けるといふ。文科省は300校つくろうと言っている。もしかしたらあってもいいかもしれないということをつたき台として言っておきたい。

永村委員

I Bのことを受けてであるが、私が高校時代にI Bを受けた時は、めちゃくちゃきつかった。私は熊本市内の高校に2年通って、インターナショナルスクールに移ったのだが、インターナショナルスクール時代は3時間以上寝た記憶がないぐらい猛烈な英語漬けと、I Bの試験準備。I Bについては冗談のつもりで書いたのだが、日本語のDPもあるとのことで安心した。長々と、色々なことを書きたくて箇条書きにし、乱暴な書き方になったが、時間があつたら目を通していただきたい。

今年は特に南アジアや東南アジアに行く機会が多く、その時にインド、マレーシア、ブータン等で子どもの数に圧倒されていて、よく車道も子どもが道をふさぐといったような現象があり、熊本市に帰ってきて地元に行ったらシーンと静かになっていて。怖くなって色々な研究などを調べてみたら、私がもし平均寿命を生きるとした時、子どもの人口が更に半分に減るといふ世界を見ることになる。熊本の出生率が20年で20%減のカーブを描いているという。その一方で、東京、大阪の大都市の人口は多くなってきているので、地方の人が都市に流れていて、熊本で生まれた人も大都市に行くから、熊本は自然出生率以上に人口減が加速するということを感じておかなければならない。単純に考えると、今のままでは学校の数は半分に減る。子どもの数が半分に減り、納税者も生産人口も減るといふ数字を見た時に、その危機感をベースに考えたのが、今ある無駄な既存の枠組みを打ち壊すこと、海外や別の都市からの子どもを受け入れることを本腰を入れて考えること。千原台高校みたいなところは、寮で使えそうところは寮にするとか。また、I B認定校とかになったらまた別に、本腰入れて他所から寄宿舎で勉強したいという生徒を入れて、ということを考えている。

私の考える一番乱暴なプランは、熊本市に市立高校は2校もいらなくなるのではないかということで、合併して、仮に生徒が500人の学校を市が二つ抱えるより、生徒が1,000人の学校を一つだけ抱える方が将来的にも合理的になる。学科によっては、二つに分かれたキャンパスで行き来できない分はICTを使って、一つの教室で、千原台の授業に必由館キャンパスの生徒もICTで参加するような広げ方をするとか、1学期は千原台とか、何曜日は千原台、何曜日は必由館とか、教員も流動的に、物理的に行き来したり。また、市が所有する図書館やホールなども優先的に市立高校が授業に使えるような自由度を持たせる。そういう風なことを軸にして、クラス、学級をやめてしまおうとか。今当たり前にある枠組みを一旦分解して、学生にとって自由の利く、キャリアを繋げる、融通の利く、選択が多くできる流動的な枠組み、それから国際的な評価を受けるIBとか、国際的に認知されているカリキュラムの採用など、それを売りに、海外からもほかの地方からも生徒を呼び込むということを考えている。

書いていることとは別として、私が想像で感じる危機感を話すと、どこの学校も死に物狂いで新しいことに手を付けると思う。クリエイティブを伸ばそう、スポーツに力を入れよう、英語を話せるバイリンガル・マルチリンガルをつくろう。一番それに躍起になるのは私立の高校だろう。そして私立の高校が減ると思う。そのうち熊本高校や済々黌高校、マリスト学園高校などのクラスの高校も、子どもの数が減ると、今まで中間くらいの成績の子まで入れるようになる。そして、下の方の、学力のモチベーションの低い子が簡単に通る高校、それはそれで需要がある。そうすると、必由館や千原台のような真ん中あたりの高校が一番人口減のあおりを食らうのではないかと思う。そこで、スポーツにしる、色んな各種仕掛けにしる、メスを入れるとしても、私立や他のエスタブリッシュメントとの競合になったら非常に苦戦を強いられることになるのではないかと考えたので、色んなものを廃止したり合併したり、フレキシブルな制度としたりするなど、極端な提案をさせてもらった。

野副委員

魅力ある高校・専門学校としては、先端技術を使った授業、パソコンやタブレットを使った授業や部活の種類が豊富で強い高校、生徒数の多い高校。生徒数が多いともっと学校行事が盛り上がっていいと思うし、部活でもお互いに競争し合えるのでレベルアップして、大会でも上に行けると思う。

どのように改革するかについては、専門の学科を増やして、メジャースポーツを強化する。メジャースポーツは、自分は野球部だったが、野球部は年々あまり活躍できないことがあるので、強化することで入ってくれる生徒も増えると思う。

専門学校は、就職率がいいことや、設備を充実させることが重要だと思う。

福西委員

必由館高校のワークショップに参加させていただいて、勉強になったが、改革で絶対にやめてほしいと思うのは、今以上に先生方の負担が増えること。これまで以上に先生方の勤務時間が増えるというのは絶対にやめてほしいと思う。

そもそも先生方は、皆さん高い能力をお持ちの方ばかりなのに、雑務に追われてしまって、生徒となかなか向き合えないとか、アウトプットばかりで、生徒の進路を考えるための必要なインプットもできないと言っておられた。

先生の時間が、なんだかよく分からない雑務が増えたということはやめてほしい。

あと、生徒がしっかりしていた。私も子どもの親で、子どもにあれしろこれしろと言ってしまう、いけないなと思うのだが、生徒のことを信じて、制服や校則、学校行事などの学校運営も生徒に任せる。本当に困ったいじめや進路などの深刻なもの以外は生徒に任せ、先生は頑張ってみる。

保護者があれこれ言うのが一番問題だと思うので、改革とは保護者や市民に、教育委員会がやることを信じて見守って下さいという周知をすることが大事だと思う。

高校というのが結局、進学する子も就職する子もいて、職業的な訓練と、いわゆるリベラルアーツ的な自分の偏見を取り除く学問的な勉強と、半々にしないといけないところが難しいとっていて、社会との関わりや、社会人との交流をしたいという生徒もいるし、アドバイザーからの意見でもあったが、企業、企業とって、何だか経済の仕組みの中に紛れ込ませてしまうのではなく、就職する人は、高校が最後の勉強をする場なので、市立ということで例えば、市の行政に、職業見学を超えたようなもっと深い取組があればいいなと思っている。深刻な個人情報に関わるようなものはもちろんで

きないと思うが、「ささえりあ」のお年寄りの介護事業の見学や、小さい子どもの育児相談室など、ああいうものにもっと出るとか。また、市長が今度1,800万円かけてフランスに行かれるそうだが、必要なこととは頭で分かるのだが、一市民としては税金で楽しそうと思ってしまう。その時に、成績優秀な学生さんは税金で、市長や議員さんと一緒に海外視察に行けるようにして、その代わりに、報告はしっかりとしないといけないけれども、そういうご褒美があれば勉強も一生懸命するのではないかと思う。そういうことで、職業訓練という部分と、実際社会で学ぶというところで、市役所の業務との連携ができないかと思った。

ビジネス専門学校もそうだが、もちろん必要な学校だが、せつかく民間ではなく、市立というところで、普通の商業ベースの勉強だけではなく、例えば、観光サービスコースというのがあると思うが、ただ英語の勉強をしてというのではなく、地域資源の観光化とか、文化の資源化というのがその地域にどんな影響をもたらすのかとか、文化の搾取とか、地域資源を享受するだけでない観光の仕組みや方法を構築するような考えを、商業ベースにはならないのだが、そういうのを勉強することに踏み込めたら面白いのではないかと思った。

あと、高校の方では、進学したり、就職したりと色々進路は変わっていくと思うが、外に出た時に悪い大人に騙されないとか、自分の身を守れるというのが絶対必要かと思う。特に、企業との競合などで、結局いい手先として使われるというだけではつまらないので、もし企業と連携するのであれば、その時に自分の身を守るだけの最低限の知識、最低限のリベラルマインド、そういうのを生徒たちに身に付けて、勉強してもらってからにしてほしいと思った。

矢野委員

一つ目の議題に関しては、二つの意見を挙げている。一つ目はクラスが少人数で、個々の能力に応じた授業をすることができる学校ということ。これはクラスを少人数にすることで、生徒と先生の会話がより密になって、その授業を受けている人の進路にかなり関連づけた授業だったり、授業後の質問や雑談などがより有意義なものになるのかなと考えたからである。二つ目は生徒が本当の意味で主体となって生活できる学校を挙げた。先日必由館高校で行われた意見交換会に参加した際に、校則の見直しが話題に出て、校則は学校設立当初や設立されて間もない頃に作られているところが多いと思うのだが、一つ目の議題に即するのであれば、新たな時代に合った校則というものに見直すということも重要だと考える。その中に生徒の意見も取り入れることで、生徒自身が校則を守るという意識が以前よりも高まるのではないかと考えた。

次に二つ目の議題についてだが、二つ意見を挙げた。一つ目は普通科目のカリキュラムと専門科目のカリキュラムの区別を明瞭にするというもの。この意見は前回も発言したと思う。私が所属している国際コースを例にして話させていただく。現在の国際コースのカリキュラムでも、十分国際的なイベントや行事があるが、改革という点においては、行事や日々の英語の授業などの内容をより濃くしていくことで、国際コースとしての色がより濃くなるかと考えている。二つ目に県立高校の先生方を市立高校にお呼びするというのを挙げた。これは正式な制度として採用することは難しいことだと思うが、期間を設けてやることで、先生方の人事交流が活発になり、その影響で生徒たちの授業参加意欲も上がることにつながると考える。

専門学校についてだが、その道で実際に仕事をしている方をお呼びして、生の声を聴く機会を現在も行っているのであれば、さらにその場を設けるということも挙げた。補足やポイントについては、資料に書いてあるとおりである。

吉山委員

3校のワークショップに参加して先生や生徒と意見交換を行った。先程、委員方もおっしゃっていたが、先生方も生徒も本当に真剣に意見を出していた。「う〜ん」という意見もあったし、「これは素晴らしい」という意見もあった。

まず、授業内容、施設設備、校則などが現在の生徒の希望に寄り添ったものであること。中には、制服についての意見を言っていた女子生徒もいた。それと、時代を先取りしたもの、例えばバンクシーとか書いたが、そういう美術とか芸術にも触れながら、色んな感性を子どもたちが持っていると思う。今は出ていないかもしれないが、子どもたちが中に秘めているものがあると思うので、美術作品などを学校の敷地内に置いてもいいのかなと思う。あと、これは先生方にも申し上げたいが、人型ロボットやタブレット

トを連動させた授業とかをやっても面白いと思っている。

やっぱり教育というのは、人が話すというか、人間が面と向かって話した方が子どもたちに響くのかなと思う。私の娘が、ある塾に高校時代3年間通っていたが、成績は一向に上がらなかった。ビデオを見ながら勉強する塾だったが、やはり、人と人が会話しながら勉強した方が、勉強の効果も上がるのではないかと。

あと、生徒たちを管理するのではなく、もうちょっと生徒に寄り添って、一人一人の個性を引き出したり、伸ばしてあげる。まあ、高校生なので失敗もすると思う。失敗した時に、それを恐れず、生徒に寄り添って一人一人の個性を引き出していけるような教育環境を整備するのがいいのではないだろうか。

先生たちの意見として、「忙しくて余裕がないから」「時間に追われて余裕がない」という意見が挙がったので、少しでもそういうことをできる学校にして欲しいと思っている。

ここにも書いたが、熊本もそうだが、現在、海外からたくさんの方が労働者として入ってきており、色んな外国の方と一緒に仕事をする場面が増えると思う。また、海外に出て向こうで仕事したり、移住したりするような未来になっていくと思う。語学の面では、大学生の時に1ヵ月だけアメリカのモンタナに行ったが、まず聞き取れなかった。中高6年間英語を習ってきて、英会話のゼミなども取っていたのだが。だから、テレビで宣伝されている「スピードラーニング」のような教材を導入するのも手ではないかと思う。

今後の対策として、色んなICTなどを活用して、海外の高校生とか大学生、国内でも遠距離の高校と連携して、ディスカッションとかそういうのも授業の中でできたらと思う。今、世界的に問題になっているようなプラスチックごみや貧困など、課題を自分たちで見つけて、それを基に英語を使ってディスカッションする。そうしたら、必要性が出てくるので、自ら勉強するのではないかと思う。

あとは、高校の方で、トップアスリートを養成するアスリートコースを創設すると書いたが、私立の高校では、アスリートコースと言っている高校もあり、中学生の段階で本気でプロを目指している子もいるので、スポーツの方でもそういうチームを創設して、アスリートコースについては、前期選抜などで生徒を集めていけばいいのではないかと。

専門学校については、上熊本駅から徒歩2分というすごい立地にあり、私の校区の中学校の隣にあるにも関わらず、何をやっているのかが分からなかった。実際に行ってみて、生徒や先生方の話を聞いて大体見えてきたので、次はもっともっとPRしていったら生徒が入ってくるのではないかと。専門学校にしては授業料が安いと思う。保護者にとっては大きな魅力。それプラス、講師の先生がベテランの方が多く、色んなこととしてくれる。時には、特別授業のような感じで他の所から講師を招いての授業もあり、生徒たちも楽しいのではないかと。

高智穂委員

「失敗がなかなか」という話があったが、失敗して何が悪いんだろうか。失敗せずに終わってしまっ、その経験がないまま大人になっているのかなと思うことがある。

「川の近くには危ないから行っちゃだめだよ」ではなくて、1回川に落ちてみると危ないことは分かる。そういう「失敗しても大丈夫だから、失敗したのが何でだったのか」というのをきちっと捉えられて、学びが進められて、社会の中で一人の大人としての軸が何か得られる高校生活になるような学校になればと思う。

あと、今から改革する時に、教員も「こういうことができる先生を呼ぶ」とか、「こういうカリキュラムを作っていく」のはなかなか難しいので、それは今やっていられっ方の方を呼んでその方に教えてもらおうと、今の先生方ももうちょっと自分の専門の授業の準備ができたりとか、クラスに対してのケアができる時間ができるのではないかとと思うので、どんどん人の力を借りて、専門的なことは「餅は餅屋」に任せられるようなスタイルでもいいのではないかと考えている。

改革と言うとどうしても新しいものに目が行きがちだが、この間のワークショップでも「子どもたちも楽しい高校生活している」との意見がたくさん出ていたようなのでそこを生かしながら今のところを見直して、そこを強化していくスタイルに変わっていったら、もっともっと楽しくなるのではないかと。

少なくとも、2年とか3年だけで終わらずに、勉強したければ4年生になったり、5

	年生になったりしてもいいと思う。
(事務局)	(事務局から、荒瀬委員及び山川委員の意見を紹介)
苦野委員長	質問ご意見があれば3分間ぐらいその時間を取りたい。
吉山委員	委員長がおっしゃった High Tech High を詳しく。
苦野委員長	<p>これを説明すると長くなるので、事務局とも相談しなければならないが、次回までの上映会を提案の一つとさせていただきたい。かなり刺激的な材料になるのではないか。これからの教育界、高校教育がどういう風になっていくのかという一つの道標になると思う。詳しく説明したいが、よければ資料をご覧いただきたい。</p> <p>次回3回目で議論をまとめていかないといけないので、その前にある程度見通しをつけたいと思う。今、委員、アドバイザーの話を聞きながら、考えるべき順序があるのかと思い、かなり具体的な所まで入っていかれた方もいるけれども、一番最初は目的や理念を共有して、そのために、キーとなるコンセプトを見出して、このあたりまでは、今日中にみんなが納得できるものがあるといいと思っている。具体的にどうするか、制度をどうするかとか、教育の内容や方法、改善をどうするかみたいなことは、次回でぐっと詰めていきたいと思うがいかがか。</p>
坂本委員	ワークショップの中での意見も、今すぐすればいいものから、永村委員のおっしゃったような非常に不安な将来がある中でどうするかという話と、今、明日こうすればいいという話が混在しているので、その辺の仕分けはやった方がいいと思う。
苦野委員長	<p>方法を考える時の鉄則は、目的と状況を共有することだと思う。ある程度現状は共有したかと思うが、もしも意見があれば言ってもらって、最初に目的と状況を共有して、そこからコンセプトを見出していくようにしたい。今までの皆さんの話で共通しているのはこういう感じかなと思ったところだが、目的・理念の部分で、この言葉をそのまま使うのはどうかという気がしなくはないが、一つ「エージェンシー」という言葉も出てきていたので、聞き馴染みのない方もいるかも知れないが、主体性、まさに自分たちで人生を切り開いていくのだということが、これから益々必要になっていくというのは、誰しもが納得することかなという気がするので、エージェンシーという言葉を使うかどうかは別にして、そういった目的を一つ置けるのではないか。そのために出てきた三つほどの、大体みんな共通していると思ったことが、やっぱり「市立ならでは」ということが大事、市立ならではで、市とどういう関係を作っていくかが大事かと思った。あと、探究とかプロジェクトとか社会との関わりというのも一つのキーワードだったと思う。三つ目に、矢野委員もおっしゃっていたが、やっぱり学校・生徒たちが主体的につくっていくことも一つ大きいかなと思うので、今のところ私としては、エージェンシーという言葉を使うかということはあるが、エージェンシーを育むことは大事だと思う。そのために、市立ならではで、何ができるかを考える。探究やプロジェクトや社会との関わりをどういう風にできるかを考える。学校を自分たちの手でつくるんだということをどうするか。これは、大きな三つの柱として、今ここで議論をしてみてもどうか。次の時点で方法の次元となってきた時に、今日出てきたのは、制度の部分で、中高一貫とか高校と専門学校を付属化してしまうとか、単位制とか通信制の導入だったり普通科の廃止とか、あと、両校を統合するとか、そういったラディカルな意見もあったので、そういったことを踏まえて、具体的にどうするか、カリキュラムの内容とかそういうことはまた次回進めていくというかたちがいいと思う。</p> <p>では、三つ話してみたいと思う。「市立ならでは」ということと、「探究、プロジェクト、社会との関わり」「学校を自分たちでつくっていく」、これについて何か意見を自由に言ってもらえればと思うが、まずは「市立ならでは」についていかがか。</p>
坂本委員	問題意識を明確に共有しておきたい。人口減少社会の中で、段々、特に若者が流出していついて。で、高校に入ってくれる子どもたちがいなくなる、と。そういう将来、非常に悲惨な将来が、何もしないでいたらそうになっていく中で、熊本で生き続けたいと

思うような子を育てるといふような意味で、「熊本市立高校ならでは」という意見があるのかなと思う。本当にこのままだと、どう考えても、人口ビジョンを見ても子どもの数は半減していくわけだから。そういう中で、市立高校がなぜなければならないのかということのをベースに、その中で熊本市としての高校とはどうあるべきか、ということのを議論していきたい。

福西委員

「市立ならでは」ということで、イメージとして、卒業後に熊本市のリーダーとして活躍して欲しいのか、世界に羽ばたいて熊本市出身の子ってすごいねってなりたいたいのか。両方なのかも知れないが、私は、熊本市のリーダーとして活躍して欲しいという思いがあったが、国際的に活躍して熊本の名前を広く広めるというのであれば「市立ならでは」ではあるが、そこに国際性も入れないといけないので、その場合も、「市立ならでは」になるのかなと思った。

田中委員

県外からやってきた私としては、市立ならではという捉え方は「公共性」だと思っていて、どんな家庭環境にあつて、どんな経済状態にあつても学校に通うことができること。それは県立も同じではあるかもしれないけど、市立という枠がより狭い枠なので、より細かくケアができるというより細かい公共性だと捉えている。もちろん熊本市民が減るのは問題かもしれないし、熊本県民が減るのも問題かもしれないし、でも、それが問題の本質ではないと思っている。どうしてかという、外国の方も増えているし、熊本で住んでいる人たちが楽しく毎日を暮らして幸せそうだったら、人って集まるものかと思つている。今、移住定住促進事業がとても流行つていて、熊本県に都会からやって来る人もとても多い。私もその中の一人ではあるが、そういう人たちは、移住定住促進事業に乗つてやつて来たというよりは、元々ある熊本の魅力に惹かれてやつて来た人たちが多くて、熊本に住んでいる人たちが楽しそうに過つていて、毎日バーベキューをしたり、カヌーに乗つたり、ツーリングしたりしている、その楽しそうに生活しているところを見て、「ああ、いいな。こういう生活がしたいな。」と憧れてやつて来ている部分がかかなり大きくて、そうやって、そこに住んでいる人たちが楽しそうに生活して、魅力的に感じたら、都会つていふかなり大きな人口を抱えているところから人口を引っ張つてくるつていうことは、無理やり熊本市民が減らないように頑張ろうというよりも、その熊本市自体を魅力的な環境にしていふこうという考え方の方が楽なのではないか。そうしたら、熊本市で市立高校に通う子たちがとても充実した毎日を過つていて、楽しそうに生活をしていたら、「必由館に行きたいな」「千原台に行きたいな」「ビジネス専門学校に行きたいな」といふ風になるのではないか、という風に思つている。自分が高校に勤務しているので、「何でこの高校を選んだの？」と何人かに聞いてみたら、「選ばざるを得なかったから選んだ」「この学校にしか行けないから選んだ」といふ子がかかなり多かつた。「じゃあ、君は今ここにいて楽しい？選んで良かったと思う？」と聞いてみたら、99%は「良かった」と答えてくれた。これは数値的に信用の置ける数値ではないと自覚してはいるが、ちょっと安心した。是非、熊本県とか熊本市ということに固執することなく、熊本市に、たまたまそこにいて、たまたま生きていた人たちが、どうすれば幸せに生きられるかのお手伝いをする、そういうスタンスで物事を考えていけたらいいなと思つている。

苦野委員長

ありがとうございます。とても面白い意見だつた。県内でパイを取り合つて潰し合つても仕方ない。でも、ある意味、都会から引っ張つてくるのはOKである。その意味で言うと、隠岐の島の隠岐島前高校は限界集落みたいな所が、高校魅力化することで島外からたくさん人がやつて来て人口が増えるという離島の奇跡をやつたわけである。そういう高校魅力化というのはいふ一つのキーになつて、逆に呼び込めるということはあるかもしれない。他に意見はないか。

池田委員

もちろん熊本市で、国際的に、全国で頑張つてくれるのが一番いいのだが、別に活躍しなくてもいいかなとも思う。さっきの、市ならではという意味では、市ならではのチャンスが色々受けられるような、例えば市の助成とか、市でしか行けない留学先とか、今色々面白い話が出ている中高一貫とか、高専一貫とか単位制とかそういうのが、熊本市ならではのチャンスが受けられる、その中で活躍する子が出ればいいが、活躍するこ

とを目的にすると生きづらくなるかと思う。

永村委員

熊本ならではのところで付け足しになるが、例えばインターナショナルスクールだったら、模擬国連とかの授業が一般的である。熊本市立だったら模擬市議会みたいなイベントで楽しく市政を身近に感じるとか、自分の意見を表明するディベートの練習をするような授業があっても楽しいと思うし、市の所有する物としては、市立図書館や体育館、ホールとかだけではなく、熊本市の動植物園というところもリソースとしてあるし、市電もあるので、熊本市のリソースというのを色々使って、何か一風変わった体験授業だったりがあったらいいのかなと思う。学校の魅力となるか分からないが、熊本市のリソースをフル活用することがあってもいいのではないかと思った。

苦野委員長

ありがとうございました。市との全面タイアップというのは、一つ大事なことになってくるような気がしてきた。

二つ目に探究やプロジェクトや社会との関わりというのもあって、これもやっぱり関わってくるなと思う。

先ほど言った、隠岐島前高校が、高校魅力化で離島の奇跡が起こった理由の一つは、やはりそういった、まちづくり・村づくりを自分たちの手でやるというプロジェクトを高校生がやる、そういった生きた学びの場が魅力化につながって、人がたくさんやって来たというのもあって、そういう意味では、まちを自分たちでつくる、そういうプロジェクトを中核にするというのも一つあっていいかなと思う。そういった流れで、探究やプロジェクトや社会との関わりといったキーワードでご意見いただきたい。

田中委員

千原台高校でワークショップが行われた時にとてもいいなと思ったのが、まちと連携したプロジェクトを既にされているということである。桜町に行かれたりとか、商店街の人たちと協力して色々イベントをしたりとか、もうすでに探究型学習を実現されているなという印象がとてもあって、そうしたことをもっと拡充するかたちで実現出来たらと思う。

私自身が研究しているものの中に、キャリア教育があるが、キャリア教育はまだまだ未熟な点もあるが、最近聞いたキーワードで、スーパーサイエンスハイスクールがあって、国がある程度予算をたくさん投入して行っているが、そういうプロジェクトを市が強気にバックアップして、宇土高校が最近大きな活躍をしているが、そういう研究するということに対して、お金を出してプロジェクト学習を強気にバックアップするということはもしかしたら、将来のノーベル賞受賞者を出すとか、そういうところが見えてくるのではないか。探究型学習はとても未来を見させてくれるキーワードだな、と思っている。

苦野委員長

ありがとうございます。我々の方で市にお金を出してくださいという答申をするのもありである。他にはいかがか。

高智徳委員

事務局と打ち合わせをする際に最初に浮かんだのは、公務員の専門学校にしてもいいのではないかということ。公務員専門の予備校のようなものではなく、熊本市に入り込んでやる期間が1年くらいあって、市の準職員のようなかたちでやってもらうというもの。公務員は、究極の総合職だと思っているので、色々なことをしなければいけない。福祉をやっていたかと思えば交通に行かなければいけないとか色々あるので、それに特化して、「何年後は公務員です」という学校になっても面白いし、安心される保護者の方も、「ここに行きなさい」というのは変だが、公務員になりたい子どもたちは結構多いので、そこも一つ売りになるのでは。結果、公務員は違うとなっても別にいいかなという感じで思っている。

もう一つ、「楽しい生徒がいれば魅力的」と田中委員がおっしゃっていたのは、まさにそうだと思うが、先日防災のフォーラムに行った時に、防災チャレンジプログラムという教育のプログラムに採用されたら助成金が出て、それを学びと一緒にやっていくというものがあつた。工芸高校という、工業とはまた違う色々なものづくりをやっている高校があつて、そこは、周りの人が高校に入ったことがないから、どんなことをやっているのか分からない、防災キャンプをやるうえで一緒に地域の人たちと泊って、「僕

たちこんなことやれます、作れます、一緒に防災キャンプやりましょう」といって、地域のおじいちゃんおばあちゃんと一緒に体育館に泊まるというワークショップをしたとか。あとは子どもたちが自治会長さんと市の職員に、「学校にある防災倉庫をチェックしたところ、食料の備蓄が全くない。それを備えてください」という訴えをして、実際にその自治会と市から、その学校の防災倉庫には食料が備えられたという、そういう自分たちで見つけてやっていって関わってということ、すごくたくさんしているところだった。そういう地域との関わりとか、自分たちが考えたことが実現していくという体験がここで生きてたりとか、この学校で学んでいるとか、自分がこういうことを言ったらこんな風に返ってきたという。

SNSとかで自分自身のことをアピールして、それに「いいね」をもらって満足を得ている子たちっていっぱいいると思う。認めてほしいという欲求が、本当に自分一人だけになっているが、本当の意味での認めてもらうというのを、色々な人との交流で、やっていったらいいと言うと、それがどんどん「あそこ行ってこんなことやって楽しかったよ」とか「こんなこと受け入れられたよ」というのは、家庭で受けられる愛情とはまた違うものを、社会の中とか学校で受けていけるのかなと思うので、そんな体験ができていけるといいのではと思う。

苫野委員長

ありがとうございます。

他に探究、社会との関わり、これに関してどうか。この後、もう一つ柱としては、学校を自分たちの手でつくるというキーワードもあるが、これは全て一緒である。この三つはつながり合っていると思うので、まとめて色々ご意見いただけたらと思うがいかがか。もしよければ生徒の方たちの意見等も聞きたいが。

川上委員

多くの人の意見と真逆になって申し訳ないが、「こうなったらいいな」というのを皆さん述べておられるが、そもそも市立の魅力というのは安いことだと思う。保護者からしても安いのはとてもいいと思っていて、では生徒にメリットがあるのかということ、今のところ生徒にメリットはない。安く学習できるというはあるが、何かが特化しているわけではないので、それを特化させたら生徒も保護者も魅力ある学校になると思う。ただ、今現状で新しい科を作りましたとか、校則を変えましたとなって、新しい科を作りましたとなったら、先生はどこから呼んでくるのかとか、デメリットをつぶしていかないといけないと思う。理想をまず作ったら、そのデメリットを一個一個つぶすような意見を言っていきたいと思う。

苫野委員長

それは大事である。やはり、こういったことがやりたいとなったら、それが可能となる条件は何かという、条件解明の時間が必要。こういった問題があるということが、川上委員が、こういったことが気になるということがあれば聞かせていただきたい。

川上委員

前に戻るが、矢野委員が、校則がちょっと厳しいと言っていた生徒がいるとおっしゃっていたが、その校則が何なのかをまず挙げてもらって、そのどこがいけないのか、それをどう変えていくのか。緩すぎてもきつすぎてもいけないので、そこは生徒と先生と一緒に決めて、お互い50%50%の意見を合わせたら、どちらも苦ではないルールができていくのではと思う。そういうところを挙げていきたい。

苫野委員長

それはとても大事である。矢野委員いかがか。

矢野委員

今川上委員からあったように、校則について言いそびれていた。校則の具体的なもので服装検査があっているが、これが果たして、生徒からの意見として必要なのかと、学業自体に支障が出たりしていないので、どうなのかという議論をした際に、先生方からも、自分たちも服装検査をしていて、これは要るのかなと言う先生がいたので、じゃあ今ある校則に対して疑問を持っている生徒や教員がいるのであれば、意見の時にも述べたが見直しというのは必要なのでは、という意味で先ほどの意見を述べた。

苫野委員長

先生方の多忙という話もたくさん出てきたが、そういうチェックの時間を削ったらいいのではと思う。千代田区立麴町中学校の工藤先生はじめ、世田谷区立桜丘中学校の

	<p>西郷校長なども校則をなくしている。そうしたら学力が上がり、学校の雰囲気が良くなり、不登校が無くなり、というエビデンスもあるので、そういったことも我々は共有した方がいいかもしれない。ちなみに、校則というのは法的根拠が全くない。野副委員いかがか。</p>
野副委員	<p>千原台のワークショップでも校則が厳しいという意見が出たが、自分は全然校則が厳しいとは思っていない。みんなが思っているのは髪型や服装のことだが、自分は野球部で、ずっと丸刈りだったので全然何とも思っていないので、今のままでいい。</p>
苫野委員長	<p>そういうことを対話する時間がほしい。そういう意味では、学校をみんなで作って上げるという思いで、そういう時間を仕組みの中に入れていくことが大事かなと思う。その他言い残したことはないか。</p>
永村委員	<p>今の川上委員のご意見、私も感じていたことで、色んな理想像を描くと同時に、無駄な出費や仕事を整理していく。永遠の足し算はない、財源もリソースも限られているということは、すごく大事な観点だと思う。</p> <p>乱暴な統廃合の話を持ち出した根底にもやはり、合併と規模を大きくすることで、無駄の排除とかそういったメリットについて、その背景には切り捨てるものがあり、そして枠を取り払ったから自由度が増すものも、それと表裏一体で、そういったことを議論できたらと思う。</p>
苫野委員長	<p>おっしゃるとおりだと思う。こういう改革を考える時、教育界は必ずポジティブリストで考えてしまう悪習がある。これもいいからやろう、これもいいからやろう、とどんどんやっていって、何も清算しないままやっていくのがこれまでの教育改革の姿だったので、本当に必要なことは何か見極めてそのための議論をしていくといいのだろうと思う。</p> <p>あともう一人いかがか。</p>
田中委員	<p>最後に二つ。一つは、どこかのワークショップの時に、校長先生が「制服をなくしたい」と意見されていてびっくりした。私も教員として勤務していて、服装チェックの担当をしていて、たまに「忘れていました」と自分の担当のところをスルーしたりしていた。スカート丈とか、もみあげが長かろうがいいじゃないかというスタンスでいた。それは先生を縛るものでもある。この子に対して校則を言うのは、今の状況では良くないかもしれないが、他の先生が言うから言わなければいけないという、先生を縛るものでもある。校則が何を求めているかということ、地域の目が一番怖かったりする。もう一つは、制服はなくてもいいという意見を聞いて、私もたまにそう思うこともあるが、ただ、違った視点をすると、制服があった方がいいという人がいるのも確かである。それは、一定の特性を持つ人たちにとって、毎日の服装を考えるのがとても負担になる子どもがいる。N高校には制服があって、それは着てもいいし着なくてもいい。そして可愛いので、高校生というアイコンをゲットすることもできる。そういう点では、制服はあってもいいしなくてもいい、着たい人が着ればいい、そういうフレキシブルになったらいいなと思う。</p>
苫野委員長	<p>ありがとうございます。制服も法的根拠はない。</p>
〔閉会〕 苫野委員長	<p>時間となったが、今日はある程度かたち、方向性が見えてきたかと思う。次回はもう少し具体的なところまでいけるのか、もう少しコンセプトの練り直しとか、あるいは可能なのかという条件とか、可能とするためにどうすればいいのか、こういった問題があるのではないかなどを話し合えればと思う。</p> <p>今日は皆さんありがとうございました。</p>

(了)